

# 留学生と日本人学生による スピーチ作成に向けた会話の分析

小笠 恵美子

## 1. はじめに

本研究の目的は日本語のスピーチの作成や文章表現のための話し合いにおいて、日本人ビジターはどのような役割を果たすかを示すことである。母語話者(以下 NS とする)と非母語話者(以下 NNS とする)の話し合いにおいては、NS がイニシアティブを取る傾向があるといわれている(Zhu 2001)が、スピーチは技術を必要とする言語表現であり、「NS であれば簡単に話せる」内容ではない。既にスピーチ作成のための訓練を受けている NNS に対して NS はどのような役割を果たすのであろうか。

本研究は、ビジターセッションの授業実践に基づいている。日本語のクラスに日本人ビジターを迎える実践は既に多くの教育機関でなされており、それぞれの機関でその意義があるであろう。その多くは、教師以外の日本語に触れる機会の増加、日本事情の紹介といった意義を持つ。日本国内で生活をしていても自分から日本人と関係を作る方法を知らない(あるいはその機会のない)留学生が日本人と交流する機会としてビジターセッションが設けられる傾向があり、本実践も日本人との交流を求める学習者の要望に応えるために行われた。しかし、学習者が「交流」を求める一方、教師は「表現技術の向上」という課題があり、ビジターセッションが実際にその能力の向上に有用であることを望んでいる。そこで、本研究ではビジターがスピーチ作成のための話し合いにどのように参加し、ビジターセッションがスピーチ作成にどのような影響を与えたかを明らかにして、より有効なビジターセッションのために教師はどのような指導をする必要があるのかを考察する。

## 2. 先行研究

NS と NNS の接触場面の研究では、「(母語話者は)自らが会話を主導する必要を強く感じている。・・・一方、非母語話者は受動的に質問に答え

る(情報提供)か、相槌で反応する。」(一二三 1999)という研究がある一方で、会話を継続する中で NS、NNS というアイデンティティ・カテゴリーを越えて関係性を形成し、会話の主導権は NS、NNS による偏りがなくなっていくという分析(岩田 2005)もある。

また、NS、NNS による協働的な作文活動の研究(岩田、小笠 2007)では、作文の推敲活動で、NNS も授業中に提示された文章構成を表す語彙を使いながら、積極的に活動に参加し、NS と対等に話題展開の主導権をとれることが明らかになった。

本研究では、スピーチのブレインストーミングに NS ビジターが参加した場合、ビジターはどのような役割を果たしうるかを示す。ブレインストーミング、NNS は授業内で何度か経験しており、話し合いの手順も教師によって提示されている一方、ビジターは特別な準備を経ずに参加している。このように、話し合いの進め方という点では NNS のほうが慣れており、主導的な役割を果たすことが予想される状況では、NS はどのように会話に参加するであろうか。また、NS の発言は NNS のスピーチにどのような影響を及ぼすであろうか。

## 3. 分析

### 3.1 データ

留学生のための口頭表現のクラスにおける、留学生と日本人学生のビジターとの会話をデータとした。ビジターとの会話は留学生がスピーチを作るためのブレインストーミングで行った。スピーチは各自テーマ案を持って 4 人(留学生 3 人、日本人学生 1 人)1 組のグループでブレインストーミング→ブレインストーミングを基にアウトラインの作成→スピーチの作成という手順で作られた。本稿では、ビジターと行ったブレインストーミングを録音し、録音状態の良かった 2 ループ(グループ①、グループ②)

を分析の対象とした。ブレインストーミングは、留学生は質問紙(質問項目一覧参照)に基づいて、同様の活動を授業中に何度か行っているが、日本人学生は、留学生との交流に興味を持っている、「日本語」に関する講義に出席しているという特徴はあるものの、「日本語教育」「スピーチ作成」に関する知識、興味があるわけではない。

- ・スピーチで取り上げる内容は本当に問題なのか?(重要な問題か?本当にそうなのか?)
- ・問題の原因は何か?
- ・問題解決のための提案
- ・提案は実現可能か?(どう実現できるか?)
- ・実行が難しい場合、他の方法はあるか?

#### 質問項目一覧

### 3.2 分析観点

データは、話し合いの話題展開と話題提供者、話し合いとスピーチの関連性という2つの観点から分析した。NNSは既に質問項目一覧の内容で話し合いをした経験があるため、NNSが話題提供者となって話し合い全体の主導的な役割を果たした場合、図1に合わせた話題展開になることが予想される。この場合、NSは話題の提供者とならないのか、なるとしたらどのような話題で提供者となるのか。また、話し合いの内容がどの程度スピーチに反映されるのか、特にNSはスピーチに取り入れられる情報を提供することができるのかに着目した。

## 4. 結果

### 4.1 話題の展開

話題は概ね質問項目一覧の質問の順に展開した。グループ①は「問題点→問題の具体例→原因→解決方法」の順に、グループ②は「問題の重要性→原因→解決方法(自分たちにできること)」の順に話し合いを進めた。また、問題の具体例や解決方法を話す過程で日本での事情、様子と各国(自身の出身国)の事情を説明し合う、ビジターに日本の事情、問題の原因等を聞くといった話題が見られた。

### 4.2 話題の提示者

話題の提示者は主にNNSの留学生だった。グループ①では会話中15回の話題変更があったが、そのうちビジターによる話題の提示は2回だった。グ

ループ②は16回の話題変更のうち、ビジターによる話題提示は3回であった。ビジターの発言は例1、2(いずれもグループ②の会話)のように日本の事情を説明するといった内容のものが多かった。

#### 〈例1〉

- A:電車の中で電話できないのは法律でできないんですか、礼儀でできないんですか。  
 B:法律じゃなくて、マナー、マナーの問題  
 C:あー  
 A:じゃあ、電車の中で食べる物が、禁止の問題もマナーの問題?  
 B:あんまり匂いのきついものを食べると周りの人に迷惑だから。  
 C:ふーん

#### 〈例2〉

- 小学生が携帯電話を持っている問題について  
 A:あー、小学生の携帯を持っているのは問題だと思いますか  
 C:問題だと思います  
 A:なんで問題だと思いますか。私は小学生が……  
 (略 小学生が電話料金を払えないことについて話が続く)  
 B:問題になっているのは、お金っていうのは、……例えばなんかモバゲーとか  
 A:モバゲー  
 B:モバゲーというのは……

例1は、留学生Aが日本の電車の中で携帯電話を使うことができないという話題から、電車の中でのマナーについて日本人ビジターBに質問し、Bが「匂いのきついものを食べると……」と説明している。Aの「マナーの問題?」という質問は、日本のマナーについてはBが良く知っているという考えに基づいて行っており、Bの応えに疑問を持った様子はない。例2はAが、小学生が携帯電話を持っている日本の事情について、Bに質問し、Bがそれに対して、日本で小学生が携帯電話を持つことを問題視する理由を説明し、その過程で「モバゲー」という新たな話題を提示している。

このようにビジターは話題を提示しても、留学生の質問に答える過程で提示するのみで、会話の構

成を決定する者ではない、また留学生はビジターを、日本事情を説明できる者と見なして説明を求めているということが窺える。

#### 4.3 ブレインストーミングとスピーチの関連性

留学生はブレインストーミングで日本人学生から得た日本の事情をそのままスピーチに反映させている。例えば、留学生 A はもともと「電車の中で携帯電話を使用してはいけないという、日本の法律を変えるべきだ」という内容のスピーチをするつもりであったが、ビジター B がそれは法律で決められたことではなく、それよりも小学生の携帯電話使用の問題を話題にすると、A はスピーチのテーマを変えた。そして、スピーチでの主張の根拠として、例 2 で示された問題のあるサイトを挙げた。このことから、日本人ビジターはスピーチを作る際の情報を提供する役割を担っていることが窺える。その一方で、A はテーマの変更後、B の説明の通りに問題の所在の明をしており、A 自身の調査、考察を加えた様子がない。このことから留学生はビジターからの情報をそのままスピーチにしてしまう可能性があることがわかる。

#### 5. まとめ

以上のように、ビジターセッションでの話し合いは、主に、同様の話し合いに慣れた留学生が主導的な役割を担い、ビジターは日本の事情、日本人の考え方の一例を示すものとして情報を提供する役割を担っていることがわかる。一方、ビジターセッションで得た情報はそのままスピーチに反映されることがあり、その際にスピーチ作成者が自身の話そうとしたことを安易に変更したり、事実関係を調べるこ

となくビジターからの情報をそのままスピーチに利用する可能性もある。教師はビジターセッションを行うに当たって、ビジターからの情報は必ずしも裏づけのあるものではなく、スピーチに利用する際には事実であるか否かの吟味が必要であること、スピーチの作り手はあくまでも留学生自身であることを伝える必要がある。

#### 6. 今後の課題

本研究は、実践に基づいて行われたものであり、ここで見られた結果はあくまでも、一例である。全てのビジターセッションで同様の結果が生じるわけではないが、ここで見られたビジターセッションの問題点を改善することによって、留学生のスピーチはどのように変化するか、同時にビジターセッションそのものに変化は生じるかを明らかにしていく必要がある。

#### 参考文献

- 池田玲子、館岡洋子(2007)『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために—』ひつじ書房 p. 63
- 岩田夏穂(2005)「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化—非対称的参加から対照的参加へ—」『世界の日本語教育』15
- 岩田夏穂、小笠恵美子(2007)「発話機能から見た留学生と日本人学生のピア・レスポンスの可能性」『日本語教育』133
- 一二三朋子(1999)「非母語話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合—」『教育心理学研究』47
- Zhu, W. (2001) Interaction and feedback in mixed peer response groups, *Journal of second language writing*, 10, 251-276.

おがさ えみこ／東海大学 留学生教育センター  
emi-oga@cronos.ocn.ne.jp